フランスは偉大さなくして
フランスたり得ない

ド・ゴール

これは、受動的な態度に
甘んじることへの拒否である

國の支え

（題字・中井信夫元大阪府議会議長）

関西防衛を支える会
（略称・関防会）
〒540-0012
大阪市中央区谷町2丁目7番6-605
TEL 06-6947-0831
発行人　高橋季義
編集人　新川貞敏
印刷所　㈱新聞印刷

第11号
（夏季号）
平成14年7月1日（月）
（皇紀２６６２年）
（大正紀元９１年）
（昭和紀元７７年）

亡国を知らざれば これ即ち亡国

「日本の危機」その本質を探る

衆議院議員　西村真悟

海軍大尉　林　市造
昭和二十年四月十二日、南西諸島方面にて戦死
京都帝国大学、海軍第十四期飛行予備学生　二十三歳

一億の人を救ふはこの道と　母をもおきて君は征きけり　（戦後識す）

この一通の遺書と母の歌だけを見ても、我が国の誇りある歴史が見えるでは無いか。しかし、戦後はこの心をことさら見ようとせず誇りをドブに捨てることによって成り立ってきたのである。あったのは、金儲けだけ。これが常態となれば、国家が存続するはずが無い。ここから現代政治の病弊は立て板に水を流すように生まれた。

結局、国家は心の喪失から衰亡すると言った。では、我が国の衰亡を画策しようとすれば、どこに攻撃をかければよいかが明らかとなる。つまり、靖国神社である。ここには、前述の林市造海軍大尉とその母の心が封印されている。日本を日本でなくすには、この心を封印して消し去ることだ。これに成功すれば、武力ではなし得なかった日本全面解体という快挙が完成する。そして、中国人は、ほとんどこれが完了したと信じた。そこで李鵬は国外で「数年後日本はない」と言ったのだ。

一億の人を救ふはこの道と　母をもおきて君は征きけり

危機とは、それを克服したときには再興の転機となり、克服できなければ衰亡のきっかけとなる。その意味で、現在日本はまさに危機である。では、この今ある危機は再興の転機なのか衰亡の転機なのか。それを見極めるためには、現在の危機の本質を見なければならない。そうすれば、まさに「衰亡の転機」としての危機の中に我が日本があることが分かる。何故なら、日本の政治は今、危機の中にあることを自覚していないからである。即ち、明治の田中正造翁が言うように「亡国を知らざれば、これ即ち亡国」なのである。危機は我々を蓋っている。しかし、我々はそれに気づかない。わが国は、国際政治という狙板の上に乗っている貝である。知らないのは狙板の上の貝だけである。これ即ち最深の危機ではないか。

そこで、この危機を「再興の転機」に転化させるための我々の責務について述べたい。そのために、まず分かりやすいほとんど自明のことを確認し、最大の戦略的要衝を明確にする。

再興の転機を求めて

第一に言えることは、五十七年間、日本人は悪いことをしたという教育を続けて来ただけで済むはずがないではないか。また五十六年間、占領軍が作った憲法を祝詞のように念じていて、ただで済むはずがないではないか。

さらに、五十七年間、政治が国家防衛構想を持たずにいれば、政治からも国民からも奉公の精神と使命感が喪失する。そして、国家も個人も、五十七年間、金儲けだけを目的に生きてくれば、ボケるのは当たり前だ。しかも、国のために戦って死んだ英霊を忘れて、経済大国もくそもあるものか。経済大国は一時の幻想で、北京とロンドンの話し合いで運命を決められた香港のようになるだけだ。

このように、始めに我々の日常感覚を忠実に点検すれば、如何に我が国の戦闘終結後五十七年、主権回復後五十年が異常であるのかがわかる。この異常さに未だに気づかない日本人の国は、李鵬に言われるまでもなく数年で「無い」と国際的に判断されるのが当然である。これ以外の結論は出ない。

例を幾らあげても切りが無い。よって、結論を言うと、我が国家再興のきっかけは、日本人の常識の再興にありということになる。非常識なことを続けていたのだから、常識に戻ることが復元の大道なのだ。

昭和二十三年春・小学校入学が総理に

これは常識の逆転という作業である。なにしろ五十年も非常識が常識として支配したのである。この年月は、小学生が六十歳を越えて内閣総理大臣になり、学校で教えられたとおりに非常識な謝罪外交などをしてしまう程の期間である。したがって、この期間を経た後での常識の再興は、あたかも地球は平らだと思い込んでいる者に、実は丸いのだと教えるような困難を伴う。しかし、地球は丸いんだから、これは常識として捨てることはできないのだ。必ず大勢となる。我が国の常識の復元も必ず大勢となる。

その手始めとして、政治の場にいる者として現代政治が如何に常識に反することをそれと気づかずにしているかを指摘していきたい。

靖国の遺書に心馳せよ

まず、現代政治は次の遺書と歌に詠れた心を顧みない。これは六月四日の靖国神社の鳥居横に掲げられた遺書とそれに応えた母の歌である。

お母さん、さよなら。一足先に天国に参ります。天国に入れてもらえますかしら。お母さん、祈ってください。お母さんがこられるところへ行かなくては、たまらないですから。お母さん。さよなら。

靖国の封印を解け

今、国家は心の喪失から衰亡すると言った。では、我が国の衰亡を画策しようとすれば、どこに攻撃をかければよいかが明らかとなる。つまり、靖国神社である。ここには、前述の林市造海軍大尉とその母の心が封印されている。日本を日本でなくすには、この心を封印して消し去ることだ。これに成功すれば、武力ではなし得なかった日本全面解体という快挙が完成する。そして、中国人は、ほとんどこれが完了したと信じた。そこで李鵬は国外で「数年後日本はない」と言ったのだ。

靖国神社である。この社があり、そこに参る日本人がいる限り、国家の再興は成る。よって、明確に宣言するが、ここ数年の東アジアのなかの国政の攻防は靖国神社をめぐって行われるであろう。つまり、我々が靖国の封印を解くか、敵が封印をさらに巧妙に隠微に続けることに成功するかである。

そこで、靖国神社の封印を解くとは、どういうことか。それは、我が国の戦いの歴史を取り戻すことである。真の文武両、尚武の心を取り戻し、子供たちに教科書で林市造海軍大尉と母の歌を教えることである。戦後教えられたように「日本は悪かったので悪い戦争して負けた」のではなく、「日本は戦い方がまずかったから負けた」という常識にもどり、そこから大東亜戦争を検証し、斯くの如く戦えば勝てた戦であったと確認しなければならない。

決して悪いから負けたのではないと。英霊は戦後の国家と政治がこの検証を開始するとき、荒ぶる大和魂となって国家再建のエネルギーを我々に抽入してくれるであろう。反対に、それを怠ったとき始めて左翼が言うように犬死となる。英霊は、俺たちを犬死にさせるなよと、今も我々に呼びかけているのだ。英霊は、敵と後世の日本に二度殺されようとしている。したがって、今行われるべきは、ある意味では命をかけた壮烈な思想戦である。これに勝たねば英霊に申し訳ない。

慰霊なき国家が成立するのか！

私が言っていることが、いささか神がかり的と思われる方は、普遍的に国家における慰霊の問題を考えてほしい。アメリカのアーリントン墓地に、アメリカ大統領が参拝するのはけしからん。そこには、アメリカの英雄ではなく、人類の敵である単なる殺戮者が葬られているだけだ。仮に、この非難にアメリカ政府が屈服して大統領が二十年間アーリントン墓地に行かなかったら、アメリカはどうなる。中国革命英雄記念碑に中国共産党幹部が参拝するのはけしからん。彼らは英雄ではなく殺戮者だ。この意見が大勢を占めて英雄記念碑が取り潰されたら、中国はどうなる。中国共産党政権は崩壊し、アメリカ合衆国も建国と社会統合の理念を失い、単なる移民の坩堝としてのカオスに戻るであろう。

国家における慰霊の問題は、かくの如く重大なのだ。アメリカのような人口国家、中国のような最近革命によって武力で成り立った国家の首脳は、本能的にそれを知っている。したがって、自己の歴史の正当性は強烈に訴える。その彼らから見て、我が国は、靖国神社参拝はけしからん、なぜならあそこには殺戮者が祭られているからという中国の非難に屈服して、総理の参拝が二十年間禁断となった。同じことが中国共産党政権に起こったらと考えれば、彼らの日本は無くなるという判断は、きわめて妥当だ。中国共産党政権は確実に崩壊しているのだから。

日本人の願望

以上で解るように、私は別に神かがりではない。国政つまり政（まつりごと）を思い、国際社会の政治家と同様の目を以て彼らの言動を観察して我が国の防御ラインを考えているだけだ。そうすれば、やはり靖国神社は急所であり最大のターゲットである。彼らはこの二十年間執拗にここに攻撃を絞ってきた。この攻防の帰趨は、ここ一年で決する。

昨年八月十五の参拝を小泉総理大臣は断念して、八月十三日に参拝した。本年は、八月十五日の騒動を回避するために、小泉総理は、四月二十一日に参拝した。いずれも、中国は口汚く対日非難を繰り返した。そして本年は、中谷防衛庁長官の訪中を断ってきた。歴代政権は脆弱過ぎる。外部の敵どころか、内部の売国者にも勝てない。あと一歩だ。強力な政権が欲しい。これが日本人の願望であり志である。この日本人の思いは、旧満州奉天、現瀋陽の日本領事館に対する北朝鮮人五人の亡命駆け込みに際して、日本領事館員のとった誠に情けない行動が全世界にテレビ中継されてますます深まっている。日本政府自身に、主権侵害に対する反発が無かったのである。

壮大な思想戦を勝ち抜く

ここにおいて、我が国の政治を突き動かすエネルギーの圧縮熱が高まっている。このエネルギーは、永田町政界の中には無いが、日本人の中にある。中央政府が占領軍に屈服しているとき、離れたところからドゴールはフランス救国の動きを始めた。我が国においても、臆病公家と売国奴が巣食う永田町から離れたところから、日本人の救国のエネルギーを統合する動きが始まるだろう。

そして、靖国神社の封印が解かれる。この一点が突破できれば、あとは自ずから掌中にある。国軍の創設、教育の再興および真の憲法の制定などが掌中に入るのだ。

我々の世代は、この壮大な大転換戦を戦い抜く責務を負っている。丁度、靖国の英霊が熱い戦闘を戦い抜く責務を負っていたように。

元全学連書記長 島成郎追悼集発刊に際して

追想の中の「二人の改革者」

元全学連
書記局次長
東原 全孝

二年前、沖縄の精神科医、島成郎氏の死亡記事が新聞に載っていた。
東大医学部卒の、この医者は四十二年前の安保闘争を卒いた男だった。
この熱き政治の時代を振り返る事も意義あろうかと筆者の快諾を得て転載する。

「沖縄の精神病患者の置かれている状態は、とてもひどく、手がつけられない状態だった。部落のはずれか、海の傍に幽閉されて、豚以下の扱いを受けていた。」

島夫妻と亜熱帯植物園の散策を楽しんでいるとき、彼は自分の仕事のことをポツリポツリと他人事のように話をした。平成十二年年二月の沖縄訪問のときだった。

六十年安保闘争を指揮した若い専門医にとって、それは血が騒ぎ、許すことに出来ない光景だったに違いない。それから数十年、沖縄で、言わば一人裸で、コンクリートで造られた「小屋」を叩き破って、なかの「生きもの」を一つ一つ、人間社会に復帰させる、いわばとり様によっては、とても過激な社会運動を彼は指導し、実行してきた。

彼の意はすぐわかった。島は「自分なりに自分の人生のけじめはつけさせてもらったぜ。」と照れながら告白しているのだった。

そして一年を経ずして、その「長年苦闘した風土・沖縄の解放区」で友人や多くの同僚に、とても惜しまれて、野辺に見送られた。

周知の通り、島は、半世紀近くもの間、安保闘争の総てを独り背中に背負って歩いた人であり、これに関わった人々の精神的支柱でもあり続けた。一方で、実践的な精神医学に全人生を投入することによって、自分の人生の軌跡を見事に描ききった、「普通でない人」であった。唐牛が生きていたら島の霊前で開口一番こう云っただろう。

「生き様も、死に様も島、人間として格好よく、上等だったよな。」と。

①

四十年以上も前になる。

「どのような色がついていようが金に変わりはない。必要な資金を調達すること。」

一言でいうと、これが方針であった。島が私にそれを直にねじこんだ。その意味が無謀で、無茶苦茶であることは、承知の上だった。

全学連書記局の通常の業務にあわせ、私はすでに書記局の次長兼財務担当となっており、安保改定阻止闘争・岸内閣打倒の動きが高まるに従って人の動きも頻繁になり、金の動きも激しくなってきていた時期だった。一・一六の羽田闘争による多量の逮捕者をだした、その救援闘争も始まった矢先である。

全学連書記局としても、全国一斉のきめの細かい駅頭カンパ活動のより一層の組織化や、全学連加盟校からの上納金の徴収を強化したのは当然であったが、それはあくまで表向きの話だった。全学連の活動が、従来の学内運動をはみ出し、社会運動の中に桁はずれに大きく膨張・展開していたので、内情は火の車だった。

早稲田車庫から国会議事堂前まで市電チャーター料一台五千円、バス七千円の時代だが、早稲田の動員は、一回の動員に二十台、三十台とその都度チャーターしていたから、こういったことは書記局の支払いではないものの、各学校単位でも大変な負担がかかっていた。(大学卒の初任給が八千円程度の時代)

当時の全学連財政状況を象徴する挿話がある。

今では考えられないが、書記局には、あとにも先にもたった一台のダイヤル式電話機しかなく、それ一台で東京都学連全加盟校と全国の加盟校の総てとを結んでいた。その電話代さえ半年も未払いで、「切断する」、「しない」で小石川電話局としばしば喧嘩をし、挙句の果ては決まって電話局の応対の窓口担当者を、反革命分子、保守反動とののしっていたものだ。それも年中行事の一つだった。「革命」運動家は、誇大妄想であるべきだとする書記長の清水丈夫は、「当局は、電話機一台ぐらい革命の根拠地となるであろう全学連事務所に寄付して当然ではないか、おめえの説得が足りない」といってはいつも交渉窓口の糠谷秀剛(当時全学連副委員長)を困らせたものだった。

今で思えば、当時も度々電話の音に雑音が入っていた。公安当局の盗聴ではないかと慰めに雨の漏る天井裏を覗いたりしたものだったが、尻尾はつかめなかった。もしそうだとすると、電話料金滞納でも、電話回線を切断できない本当の理由が権力側の方にあったという仮説も有力となる。

今では、「革命の発祥の地」はおろか、当時最大の安保改定阻止・岸内閣打倒の情報発信基地であった全学連書記局のバラック小屋はおろか、その所在地、金助町という地名さえ消滅しているが。金欠であっても意気軒昂で革命が何たるかも知らないにもかかわらず、革命前夜がやってくるかも知らないという雰囲気が充満していたが、金助町の足元は一時が万事、お粗末な状況だった。

余談になるが、当時の書記局では、この「誇大妄想」と「珍奇」が一種の隠語として大変人気があった。「それちょっと誇大妄想じゃない」→「それは闘争方針として面白い決定しよう。」と同義語となる。また無党派や他派の活動家がブンドの方針に近くなり、闘争に有利となると、「あいつこの頃は誇大妄想だよ。」とか「あいつは最近珍奇だよ。」となる。そんなことが会議で報告されると、「おーおー、やったじゃん。」と云った具合。

一体、島を頂点とするブンド(共産主義者同盟)に結集した人々は、一人一人思い浮かべても実に多種多才であったが、しかしご本人も含め押しなべて大雑把で、愉快で、女子大の同志諸君も含め革命の「妄想男」や「妄想女」が大変多かった。

日常の財政活動はというと、全学連の、あるいはブンドの活動に関する、また安保改定や岸内閣に関する新聞や雑誌の記事をチェックし、これらに対してこちらに肯定的な意見や反応を嗅ぎ取ると、それが誰であろうと面会をもとめた。

自民党代議士から俳優などの舞台役者の類、文化人、銀行家、宗教家、商業者、病院経営者、任侠の徒等々雑多を極めていた。資金集めで大事なことは、当然ではあるがその必要性を詳しく説明する事に尽きる。これらの人士に対して全学連の闘いの目標、学生が立ち上がらねばならない必要性、岸内閣の性格等々について懇切丁寧に説明することだった。

みんな事情を知りたがっていた。資金調達の目的を少し踏み込みすぎて、新宿商店連合会青年部のように、数百名のデモ隊を組織してしまうことにもなった。六・一五当夜国会前の学連主流派のデモに合流したから大騒ぎになった。でかいパープルの旗に「民族社会党」と染め抜かれていたから、学生のほうは右翼と間違い、小競り合いになるという笑えないことにもなった。

これら金の流れについての経過は、学連書記局を通さず、逐一、島に報告した。従って私の活動内容や範囲、接触した人物についての流れは、当然、彼は把握していた。

安保後約三年後に、私が極く軽い気持ちで田中清玄や多くの人から資金援助を受けたことを漏らしてしまった。そのためマスコミの好餌となったことがあった。私が敢えて事実を公表したのは、それは資金援助をして頂いた方々へのせめてもの感謝とお礼の意味であったし、今でも「当然のことをした」までだと思っている。もちろんそのやり方は、唐突で、若気の至りというか、軽率であったことは否めない。ディスクローズした事と時期は私の独断であった。

島は、大騒ぎになった後でも、陰に陽に私を支えてくれた。その渦中でもあったが、私の叔母が突然死した時、二十人近い人間を派遣してくれて落合斎場で葬式を仕切ってくれたりもした。

②

島成郎と田中清玄との交友関係について今まで語られていないので、その二人の社会改革者の出会いやその後の交流など書き留めておきたいと思う。

既に田中清玄とは、資金の面で関係が成立していたが、ブンド書記長との交流となると対外・対内的に慎重にも慎重な扱いが必要であった。

当時、田中清玄といえば、本人は不本意だろうが、日本国内では、反共右翼の大物という見方が定着していた。全学連サイドとしても、同盟書記長の島が、右翼の大物と関係を持つこと自体が冒険であり、大変な決断を必要とした。

いまとなってはほとんど想像にすぎないが、当時の島の胸中にあった事柄や状況判断は、以下のようなものではなかったか。

一、敗戦後世の中が変わったとはいえ、日本の政治を相変わらず戦前からの旧守勢力が支配していたし、その象徴が岸信介を中心とした利権的政治構造だった。

児玉誉士夫などの率いる極右組織もこれを陰に陽にバックアップしていた。そのため、マスコミも財界もこの内閣に批判的であった。

二、岸内閣打倒が共通項だった。田中清玄の方は、これを機に旧守勢力全体を淘汰して、新生産業国家日本の出発点とすることだった。そのためには、莫大なエネルギーのうねりと爆発が必要であった。他方、島自身は革命を遂行する団体を創ろうとするブンドとは、将来どこかで死闘を演じることになるとしても、この局面では、岸内閣打倒に有利となるもの、必要となるものなら何でも手元に集中しておいても悪くない。このプラグマチズムは、通常の左翼の発想と図式では考えられないが、この局面においては、田中清玄は隠された援軍である。

三、確かに今までのところ、学生を主体とする大衆運動をリードしては来ているが、日本の既存のマルクス主義者やその信奉者達は、ロシアや中国のプロパガンダの受け売りをしていたに過ぎない。鼻からこれらの人士に頼ることも相談することも出来ない。マスコミの報道以外に、現実に進行している国内外の体制・反体制に関する情報、特に体制を動かし、影響を与えている人脈、仕組み、その理念、思想について、あまりにも無知でありすぎた。島は、そのような情報に付いて誰よりも強い関心を示していたと思う。

四、当時の学生運動主役たち諸君の年齢は、二十歳から二十二歳だったから、当然島が二十五―六歳となる。主役諸君は、革命理論(世界同時暴力革命論)の歴史や理論は精通していても、打倒すべき対象となる日本の権力や実態について殆ど知らなかった。この世代層による闘争の総てを任された島としては、年配の相談相手もおらず、人には語り得ないほどに孤独だったのではないか。

③

一方田中清玄はというと、私の知悉するかぎり、当時、安保闘争の最中でも、シンガポール独立やタイ国皇太子の(現国王)擁立を実現するため、日本をたびたび留守にしていた。日本でのマスコミの風評とは異なり、彼はこれらの地域では、「トーキョータイガー」と呼ばれた革命家であり、中東から東南アジア諸国の独立のために命をかけた熱血漢だった。

国内的には六十年安保闘争が吹き荒れていたが、外の世界では、まさに地球的規模で多くの被植民地諸国に於ける独立闘争・革命の嵐が吹き荒れ、これらの国々が次々と宗主国から独立を獲得していた時期に当たっていた。

また彼は、戦後日本に温存された旧守勢力と一切の妥協をせず、それに挑戦状をたたきつけ、若き企業家、政治家、学者等、新興勢力を糾合して新しい、強力な日本産業国家の再建に尽力していた。

たとえば、日本勃興の戦後史の中で、産業の戦略物資といわれた石油を語るとき、田中清玄を除いて語ることは出来ない。例はいくつもある。第二次世界大戦敗戦後初めて中東の石油を日本に導入するとき、アブダビ石油を語るとき、石油パニックの時スハルト大統領と直談判してインドネシアの石油を導入するとき、ことごとく彼が先導役を果たした。

彼の亡くなる数年前に、アラブ主長国連邦の国王が日本訪問し、二人の日本人にお礼をしたいとして中山素平と田中清玄に勲章を贈った。日本国家にはもっと貢献しているのだが、その方からのお呼びはなかった。

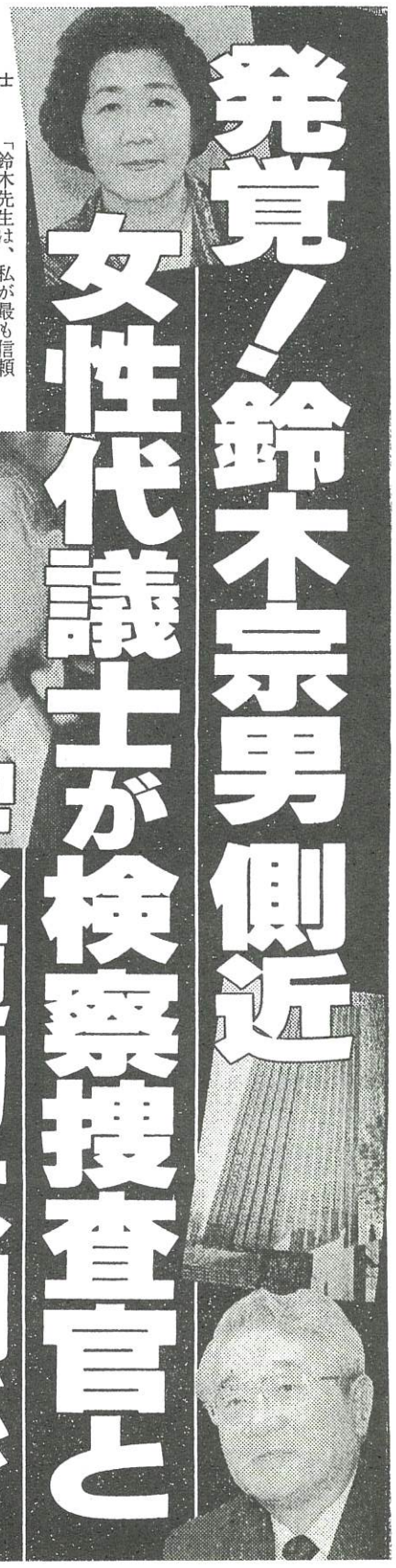
産業界に多重層のネットワークを確立する傍ら、これにブレーキを掛ける連中、今だ権力の中枢にいる旧守派との暗闘や、独占資本の支配に対抗すると称して工場占拠・労組による経営管理まで行おうとするソ連(当時)の第五列、日共の指導する労働争議などを分裂・解体する仕事にも体を張った。泥沼に叩き込まれていた王子製紙苫小牧の百八十日に及ぶ争議の現地指導を最後まで行い、解決させ、会社蘇生の基礎を固めた事などは、その一例である。

なにをするにしても、理屈より行動の人だった。

(文中敬称略)

〈次号に続く〉

発覚！鈴木宗男側近女性代議士が検察捜査官と「不適切な関係」



岡下信子代議士

いよいよXデー近し

自宅や議員会館への家宅捜索でついに大詰めを迎えたムネオ捜査。鈴木宗男氏本人の逮捕も秒読みといわれている折も折、ムネオ側近議員の新たな疑惑が発覚した。しかも、「共謀」していたのが、なんと検察捜査官だというのだから、国民は一体誰を信じればいいのか？

週刊文春
6月6日号より
転載

「鈴木先生は、私が最も信頼している先生です」

今年の一月末、大阪府堺市のホテルで行なわれた新年互礼会の席上で、地元、大阪十七区選出の衆議院議員、岡下信子氏はこう挨拶した。主賓はもちろん、鈴木宗男氏である。

「一月末といえば、まさに、アフガン復興支援会議へのNGO参加拒否問題で、鈴木代議士が外務省に圧力をかけたことが問題になっていた時期。そんな時に鈴木代議士を地元の新年互礼会に招くという岡下さんの神経を疑いましたね」（出席者の一人）

五月二十三日、東京地検特捜部は鈴木宗男氏の自宅、事務所など数カ所に家宅捜索に入った。大手紙司法担当が語る。

「このガサ入れの主目的はタマリ（裏金）の発見でした。特捜部は狙い通り、宗男氏の政治団体である『北海道開発研究会』の帳簿に記載されていない三億円もの裏金の存在をつかんだ。今後はこの金の『入り』と『出』を解明していくことになります。『入り』に関しては、すでに宗男氏に献金していた業者を厳しく叩いており、何とか贈収賄での宗男氏逮捕につなげたい。『出』については、二〇〇〇年六月の総選挙の際に宗男氏が自民党候補にばらまいたという証言があり、裏金の行方も捜査のポイントになります」

岡下氏はその二〇〇〇年の総選挙に、「大阪一の激戦区」といわれた十七区から初出馬。無名の新人だったにもかかわらず、選挙期間中は、前出の鈴木氏をはじめ、野中広務氏、綿貫民輔氏ら橋本派の領袖クラスが次々に地元入りし、他陣営を驚かせたという。

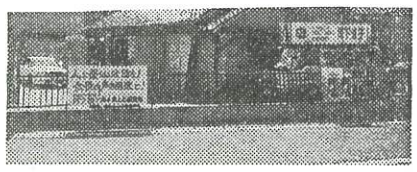
「岡下さんの亡夫、昌浩さんは元大蔵官僚で、一九九〇年に香川二区から無所属で衆院選に立候補したものの落選。九三年に大阪に移り、その後二度にわたって国政を目指したのですが、九八年の三月に志半ばで亡くなりました。その遺志を継ぎ、出馬したのが信子さんでした。対立候補を加藤（紘一）派が支援していたこともあって、橋本派は異例の応援態勢を敷いたんです」（自民党関係者）

そのかいあって、岡下氏は初当選を果たし、橋本派入り。当選後も宗男センセイから盆暮れのモチ代をちゃっかりもらうようになったという。

「鈴木氏は、来るべき〝ムネオ派〟結成の日に備え、『ムネムネ会』を中心に、一～三年生議員にモチ代をバラ撒いていましたからね。岡下氏もその例に漏れず、鈴木氏の資金管理団体『21世紀政策研究会』から百万円の寄附を受けていました」（政治部記者）

まさに宗男氏の〝子飼い〟ともいえる岡下信子代議士だが、そんな彼女に〝親分〟に負けず劣らずのスキャンダルが発覚した。

堺市の南西部に位置し、旧家とニュータウンが共存する住宅地の木造平屋建ての一軒家。「自由民主党大阪府17選挙区支部連絡所」、「岡下信子後援会連絡所」の看板が並んで掲げられ、岡下氏のポスターが貼られたこの家が、岡下氏の自宅だ。自民党大阪府連関係者が語る。



これが問題の自宅

「故岡下昌浩さんがこの家に越してこられたのは九五年六月のことでした。九三年の総選挙で、大阪五区から自民党公認候補として二度目の出馬をしたものの、落選。その後、この大阪十七区から三度目の出馬をしようと、阪南市から引っ越してきたんですが、その際、知り合いのH大阪府議（当時。後にあっせん収賄事件で辞職）に、この家を紹介されたそうなんです」

そして昌浩氏の急逝後も、岡下ファミリーは現在まで、この家に住み続けているのだが、この土地、建物、実はいわくつきの物件なのである。

同物件の登記簿謄本をみると、この土地・建物はもともと、地元の建設会社社長が所有していたのだが、八六年以降、所有権者が二度にわたって変更。八九年十二月には、大阪府中小企業信用保証協会の申し立てにより、大阪地裁堺支部が差押さえ、競売の開始を決定している。

しかし、同物件の買い手はなかなかつかず、九九年八月に堺市内のA（59）という人物が落札するまで、約十年もの間、この土地・建物は競売状態にあったのだ。

しかし、岡下信子代議士の亡夫、昌浩氏が、この物件に住み始めたのは「九五年六月」。ということはつまり、岡下ファミリーは約四年間にわたって、競売物件に住み続けていたことになる。競売物件に詳しい弁護士が語る。

「一般的に、競売物件に賃借人なり、不法占拠者が居住している場合、競売の最低売却価格が下がります。さらにもし誰かが、入札価格を下げるなど『公の競売又は入札の公正を害す』ことを目的に、競売物件に住んだり、賃貸したりしているのならば、競売入札妨害に問われます」

現職代議士が「競売入札妨害」とは、俄かには信じ難い。小誌は、岡下氏を直撃した。

――現在、岡下代議士が自宅として住んでおられる土地・建物が、競売物件だったことはご存知でしたか？

「九九年まで知りませんでした。そもそもあの家に住み始めたのは、夫（昌浩氏）がH元府議に、Bさんという地元支援者の方を紹介されて、三人の話し合いの中で決まったんです。私があの家に本格的に住み始めたのは九八年夏からですが、その翌年の九月に、Aさんという方がお見えになり、『私が競売で落としました』と言われたので、初めてこの物件が競売物件だということを知ったんです」

――では、一体誰に家賃を支払ってらっしゃったのですか。

「Bさんです。夫の死後は私がBさんに家賃を支払ってました」

ところが登記簿のどこを見ても、B氏の名前は見当たらない。そこで小誌はB氏並びにH元府議に取材を申しこんだが、いずれも拒否された。

「岡下さんが賃貸借契約を結び、家賃を支払っていたのならば、法的責任はありません。ただし、登記簿謄本を見れば、所有者がB氏でない可能性があるのは明らか。そんな誰にでもできる確認をせずに、競売物件に住み続け、結果的に、物件の最低売却価格を下げることに加担していた疑いもあるわけですから、少なくとも政治家としての道義的責任は免れないでしょう」（前出の弁護士）

ところが、小誌が岡下氏に「政治家としての道義的責任」を質したところ、岡下氏は逆ギレしてこう語ったのだ。

「そんなこと知りませんよ！夫が決めたことで、私は何にも知らなかったんですから！」

おまけに親分、ムネオ氏に話が及ぶと「私には今でも鈴木先生が不正なことをしてお金を集めていたという認識はありません」とコメント。鈴木氏からの百万円の寄附についても「せっかく先生からいただいたものをつき返すなんて失礼なことはできませんっ！」と、橋本派の領袖もビックリの、ムネオ擁護論を展開したのである。

さらに岡下氏によると、A氏がこの物件を落札した後、岡下氏とA氏が正式に賃貸借契約を結んだのは、岡下氏が初当選してから三カ月後の「二〇〇〇年九月」だという。

ではその間、約一年分の家賃はどうしていたかというと、岡下代議士、いけしゃあしゃあと「Aさんの好意で免除してもらっていた」と答えたのである。つまりはタダで住んでいたというわけだ。

政治資金規正法によると、「金銭、物品その他の財産上の利益の供与又は交付」は「寄附」として政治資金収支報告書への記載が義務付けられている。

ところが岡下氏の資金管理団体である「岡下信子後援会」並びに政治団体「岡下政経研究会」の九九年、二〇〇〇年の収支報告書には、A氏からの寄附の記載は一切なく、政治資金規正法違反の可能性が極めて高いのである。

しかも、このいわくつきの物件を落札し、岡下氏に「好意で」貸したAという人物は、なんと大阪地検で「統括捜査官」の肩書きを持つ、現職の検察事務官なのである。

A氏をよく知る人物が語る。

「Aは昔から暴力団組長や、その関係者とも親交のある人物。そもそも岡下が住むようになった土地は、建設会社から、Aの友人の運動団体幹部が、借金のカタに取り、親戚の暴力団組長に管理させていた物件なんや」

暴力団とズブズブの検察事務官

さらに、この人物によると、同物件の実質的な所有者は、競売にかけられる前からA氏だったというのだ。

「実は運動団体の幹部はAにカネを借りとって、そのカタにあの土地の権利証を差し入れたらしいんや。そしてAはこの物件の最低売却価格を下げることを狙って、暴力団や岡下を住まわせ、下げ止まったところを買い叩いた。岡下が家賃を支払っていたというBという人物も実はAの友人。つまり競売入札妨害の〝黒幕〟はAというわけや」

A氏にまつわる〝黒い〟エピソードはこれだけではない。

「Aはヤミでカネ貸しをしってな。ある暴力団組長がAから借金し、それを返さんまま、逃げたことがあったんやけど、驚いたことに、Aは極道を使って、その組長の知人に、借金返済の追い込みをかけたんや」（別の関係者）

そこで小誌がA氏を自宅で直撃したところ、

「あの家は競売で安くなったから落札しただけで、入札前から実質的な所有者だったことも、競売入札妨害を意図していたこともない。また借金の追い込みに、暴力団を使ったこともない」

と全否定。ただし、岡下氏の自宅に関する情報には精通しており、暴力団関係者との金銭の貸し借りなどの〝親交〟については隠そうともしなかった。

去る四月、大阪地検特捜部は、競売物件を巡って暴力団と取引のあった三井環・前大阪高検公安部長を詐欺の疑いなどで逮捕した。

が、A氏のような〝不良〟検察事務官をこのまま野放しにするならば、小誌が先週号でも指摘したように、「三井逮捕は検察の裏ガネ〝調査活動費〟疑惑隠し」との謗りは免れないだろう。

堂々と競売物件に住み続け、明らかに政治資金規正法違反を犯しているにもかかわらず、「知らなかった」と開き直るムネオ系女性代議士と、暴力団とズブズブの関係を続けてきた検察事務官との「不適切な関係」……。

拝啓　原田明夫検事総長殿

こんなことでムネオ捜査、ホントにだいじょーぶなんですか？

外交、国防などは票にはなり得ない、とはよく言われる事である。

我が国の至宝・西村代議士の真価が、国家の根幹を考える男が、このような女性に選挙で負けるとは実に情けない。政治的未成熟さである。

故に、あえて週刊誌より転載した。

お詫びと御礼

会員の皆様には、私の重病説が流布され大変ご心配をかけました。

お詫び申し上げると共に、私に寄せられた快復への祈りや厚い思いに厚く御礼申し上げます。ありがとう御座いました。

十万人に一人といわれている白血病（血液の癌）に罹るとは夢にも思わぬ事でした。本当に人の世には、いつ、どこで何が起こるか判らないのであります。人々に危機管理を説きながら、自分自身の健康管理については、身辺多忙の中でつい過信し、放置しがちであった事を今更ながら反省し恥ずかしく思っています。お陰様で退院以後、薬の副作用は続いておりますが次第に元気を回復しております。どうかご放念下さい。

年初から微熱が続き少し疲れ易いかなと思う程度の自覚症状以外には思い当たる事はありませんでした。医者に云わせると「だから怖い病気なのです。血液検査で運良く発見する以外には、多くの人が風邪程度の対応で突然死。或いは併発する肺炎、脳内出血で多くの人が亡くなるのです」と。

二月二十六日、血液検査の結果、単なる風邪ではない、結核でもない、自分には判らぬ所があると診断され（この医者は偉い）翌日二月二十七日、血液専門医の診察を受け、骨髄液を採って致命的な病状の進行を発見されました。「このままでは一週間、長くて二週間の余命です」と。その夕刻、ビッシリ詰まった予定は全てキャンセル。家族と共に二人の医師から告知される事になりました。「勿論、治療の成否にもよるが、老年でもあり余命は一ヵ月か二ヵ月、長くて三ヵ月、会わねばならぬ近親者には早く会っておいて下さい」と真剣な顔で云われると私自身は覚悟はしていたも妻や子供達は堪らなかったと思います。娘婿はこの冷酷な話しを聞いて夜中に声を上げて泣いたそうです。

そのまま直ちに入院して制癌剤の点滴が始まります。体力・精神力との闘いです。一般の癌の告知は現在では常識ですが、統計上の余命の数字が出ている白血病の告知はやはり相当のショックを与えるでしょう。しかし本人には告知せず隠しても、陰で泣きながら看病する家族は堪らぬでしょう。だから告知するのは良いことだと思います。その時すぐ思い浮かんだ事は、昨年九月十一日のニューヨークのテロにより一瞬にして数千の人生が消された事です。又、五十数年前、昭和二十年八月六日、九日、無辜の乳幼児を含む数万の生命が核爆弾投下によって奪われた事です。その犠牲者達に比べると……只々合掌するのみ。

私は元海軍軍人ですから、あの戦争が続いておればいずれ特攻隊に行くのは当然でしょう。思えば人生二十年余のつもりが七十七年にも伸び、死んだ親友の分まで生きて参りました。我が生涯はこんなにも長く生かして戴き、多くの師友に恵まれ幸せで悔いなき人生であります。有り難し有り難し。感謝は尽きません。入院中、私は毎日出来るだけ明るく笑顔で楽しく語る努力を重ねました。和顔愛語の実践であります。

「残る桜も散る桜」です。お互いに靖国の桜に恥じぬよう、日本再興のために国防の支えとなって、精一杯生き続けようではありませんか。

残る桜も散る桜

日本再興のため国防の支えとなって

会長　高橋　季義

民族衣装で靖国神社を参拝した高砂族の関係者

台湾・高砂族義勇兵関係者が靖国神社参拝

大東亜戦争中、日本軍に従軍した台湾の先住民族「高砂族」の関係者三十三人が、日本の支援組織「あけぼの会」の招きで、去る四月三日民族衣装をまとい靖国神社を参拝した。

この、「あけぼの会」主催の大阪歓迎委員会の発起人を小会の会長・高橋が引き受けていたのだが、二月、急遽入院の羽目となり参加できなかった。そこで、お詫びを兼ねて高砂族一行のお世話をされた、大阪世話人代表の小林正人氏の書簡を掲載する。（写真参考）

…前文略…

かねてから、お耳を煩わしておりました、高砂義勇隊生き残りの勇者、並びに高砂義勇隊戦没者遺族及び霧社事件関係の招日運動の件、昨年のニュウヨークに於ける同時多発テロの影響により一時中断をしましたが、その後いろいろの曲折を重ねましたが最終的には予定通り四月二日に感動の来日を果たしました。

私は、当初からの関わりから成田の出迎え、翌日の靖国神社参拝並びに関西に於ける二日間の観光をお付き合いさせて頂きました。

靖国神社では昇殿を致し深々と頭を垂れての鎮魂の祈りに感動いたしました。奈良・橿原神宮参拝では宮司の歓迎の御挨拶を受けました。宮司の御言葉に「橿原神宮は、紀元二六〇〇年の奉祝事業として造営されたもので、ほとんどの部材は台湾檜が使用されています」との話しは、台湾の皆様を喜ばしました。また紀元二六〇〇年事業と聴いた台湾の人達は一斉に、紀元二六〇〇年奉祝歌を唄いだしたのには驚かされました。「……紀元は二六〇〇年、ああ皇国に日は昇る！」今日の日本人で何人、この歌を忘れずに覚えているでしょうか、感動するとともに感心を致しました次第であります。

この人達は山の霊気と言う試験管の中で純精培養されたに違いないと思いました。ほとんどの人達が初来日であったため滑稽談、失敗談もありましたが愉快で楽しい旅であった事と存じ、世話人として嬉んで居る次第であります。同封の写真は彼等の旅日記であります。御笑覧を賜れば至福に存じます。一行は本、四月十二日に福岡空港から無事に帰国の途につきました。

以上、走り書きで失礼に存じますが、御報告を申し上げました。季節の変り目御自愛専一を祈念申し上げます。

敬具

平成十四年四月十二日

小林正人

高橋季義様

編集後記

＊小会の高橋会長が難病に罹り、国運を賭した思想戦のさなか名誉の戦死かと思われたが無事退院して元気な姿で、従来にもまして意気軒昂な正論を披瀝してくれた。病床にあっては予備役編入を口にされたが、数多の役職のなか、小会だけは続投を宣言された。まずは一安心である。

＊東原吉伸氏は元全学連書記局次長で、昭和三十五年（六十年安保）安保当時、警視庁に逮捕されること数回におよぶ。軍資金を田中清玄氏などから引き出した男で、かって月刊誌『諸君！』に西部邁氏が「ユダと呼ばれた男」のタイトルで東原氏を述べていた。

三年前、「大和心のつどひ」に彼を招き当時の話しを聞いた。そのおり、国士・加藤四郎氏（カネミ倉庫社長）がポツリと漏らされた「今、全学連が健在ならば、日本はこんなていたらくにはなっていない」。戦前、大陸で縦横の活躍をされた加藤氏の本質を見抜いた言葉に、国士の国士たる所以を知った。

＊左の東原氏と右の編集子は二十数年来の交遊をもつ。彼と安酒を呑んでは世界政治・経済・歴史を語って倦ところが無かった。互いの胸底には憂国の情熱が渦巻いていたからである。あの騒然とした、明日にも左翼政権が樹立されそうな雰囲気を肌で知る人達も総て還暦を過ぎて、往時茫々の感が深い。

＊前門の虎（米国）、後門の狼（中国）の政治環境に我が国はある。虎について東京大学名誉教授の経済学者・宇沢弘文氏が『日経新聞』三月二十三日の「私の履歴書」に次のように述べている。

……昨年九月十一日の同時テロの時、日本の駐米大使だった人が「戦後、経済的な問題が起きると、米国は必ず日本経済を救済してくれた。日本は米国から多大な恩恵をうけている」と言っていたが、実際にはそういうことは一度もない。日本経済を利用し、具合が悪くなれば主義主張を変え、対敵取引法まで適用する。米国が日本をどう見ているか、この一件で明らかだろう。……

狼については世界一の残虐な刑罰（両手、両足を切断して便所の底に放置、生の本能は人間の排泄物を求めざるを得ない状態に置く）を発明した国であるが、饗応も、また凄まじい。辺境のウイグル辺りの、碧眼の美少女を拉致して宮殿の奥深くに飼養し、その処女性を損なう行為者は斬首となった。重大な交渉事には、シジミ・アサリ・ハマグリであれ、交渉相手の性癖に合わせて夜伽に供する。これが百年前の清朝時代まで行われていたのである。共産党帝国の中国はその伝統を濃色に受け継いでいる。訪中した日本の政治家は、多分に、抱せられ、握らされて写真など証拠を採られているだろう。アンパンの橋龍などは、その典型だろう。だから彼等は支那に屈服しているのである。

この虎と狼に対するには、西村代議士の説く靖国神社の封印を解かなければならない。

＊とうとう鈴木宗男が逮捕された。この亡国の輩から餅代を貰っていた女性代議士の興味尽きない記事を週刊誌に見つけた。我らが誇り、推薦する、国士・西村代議士の選挙区であり、このオナゴに前回選挙で西村代議士は敗れた。橋龍、野中のエゲツナイ選挙応援（公明党を含む）の為である。選挙の直前、西村代議士は国会で橋龍の支那女の問題を追及していたのでその報復と推量される。今回、あえて、国益のため週刊誌の記事を掲載した。（新）

同期の桜を歌う会
場所：大阪護国神社
日時：平成14年4月6日(土)
13：30～16：30
◎皆様奮ってご参加下さい！
参加費用 1,000円
（ビール・おつまみ付）
大阪市中央区谷町2－7－6
みのるビル605 〒540-0012
電　話(06)6947－0720
ＦＡＸ(06)6947－0830

株式会社サンワ運行委託
送迎バス運転代行の安心と信頼の責任集団
代表取締役 山本 覺
〒570-0032 大阪府守口市菊水通二－十九－一 大阪〇六（六九九三）五六四五
〒652-0806 神戸市兵庫区西柳原六－四 神戸〇七八（六五二）五六四五 フリーダイヤル〇一二〇－七七－五六四五

死んでたまるか!!
抗ガン作用のある
β－グルカンが
アガリクスの3.8倍!!
～免疫力を高めます～
ガン・糖尿病・高血圧などの方に
ハナビラタケ含有食品
花珊瑚
代理店 株式会社 日生工研
代表取締役 前田 稔
大阪市福島区吉野4-27-12
TEL(06)6462-8528
FAX(06)6462-5824

交通至便・駅前・一泊五、五〇〇円(税・サ込)～
ビジネス イン ナンバ
〒556-0011
大阪市浪速区難波中一－一－二
TEL(〇六六六四五－七七七一
FAX(〇六六六四五－七七一〇

印刷全般
株式会社ダイワ
代表取締役 釋迦郡 文雄（シャカゴオリ フミオ）
〒536-0015 大阪市城東区新喜多一－一－三
TEL〇六(六九三二)六四一二
FAX〇六(六九三二)六四一六
e-mail:contact@daiwa1.com

國の文

（題字・中井信夫元大阪府議会議長）

関西防衛を支える会
（略称・関防会）
〒540-0012
大阪市中央区谷町2丁目7番6-605
TEL 06-6947-0831
発行人　高橋季義
編集人　新川貞敏
印刷所　㈱新聞印刷

第１２号
（秋季号）
平成14年10月１日（火）
（皇紀２６６２年）
（大正紀元９１年）
（昭和紀元７７年）

千萬の
軍なりとも
言挙げせず
南の海に
逝きし君かも

佐々木信綱

小泉訪朝…PART 1

神算鬼謀はありや？

焦ることなかれ

大義は東アジアの安全保障の確立

衆議院議員
小池百合子

北鮮の財布・朝銀信組

「小泉訪朝」の第一報は、海外視察先のフィンランド・ヘルシンキでの朝食会場に飛び込んできた。この耳を疑うニュースを他の同僚議員たちに伝えるやいなや、その場が蜂の巣をつつくような騒ぎとなったのはいうまでもない。

さっそく私はヘルシンキから神戸の有本さん宅に国際電話を入れた。欧州の留学先から拉致された有本恵子さんのお母さん、嘉世子さんは気丈にも「やっとこれで始まりですわあ」と落ち着いた口ぶりで私の励ましに答えてくれた。とにかくこのお母さんはたいした人だ。何事にも動じることはない。娘が拉致され、国民を守るはずの外務省には門前払いをされ続け、心ない者から脅されることもあったという。それでも微動だにせず、むしろ他の拉致家族のことを気遣う余裕さえある。

さて、今回の小泉総理の突然の訪朝だが、わが国民を拉致し、不審船が近海をうろつき、テポドンを発射し、核開発を続け、朝銀信組を財布代わりに架空口座を駆使してきた北朝鮮という「悪の枢軸」国に、なぜわざわざ日本の総理大臣が出かけねばならないのか、私にはさっぱりわからない。

足元を見透かされる

一般的に敵対関係にある外交交渉の場合、まずどこで会うのか、ヴニュー（会場）の設定からして、交渉ごとになる。今回、日本側のトップが平壌にまで出かける図は、最初から日本が先方に譲歩しているに他ならない。第三国を挟んで、別の借りを作ることを避けたい気持ちもわからぬではないが、何も日本側が、のこのこ出かける必然性はない。

小泉訪朝の際、「政府専用機での乗り入れはお断り」という北朝鮮の意思表示があった段階で、訪朝中止をうたうべきだった。加えて言うなら、訪朝発表直後の九月四日、不審船の航行を察知したときにも、訪朝中止を唱えるチャンスがあったのに無視したのはナンセンス以外のなにものでもない。「王不見王」という中国の兵法がある。トップ同士が会って、コトがまとまらねば、「後がなくなる」という戒めである。北朝鮮は首領様以外にデシジョンメーカーがいないため、トップ会談以外にラチが開かないというが、それは先方の事情であって、日本の問題ではない。拉致問題の早期解決以外に、日本が焦る理由はさらさらないのである。

一時、小泉総理が訪朝に「政治生命をかける」と「言った、言わない」が問題となった。最初に、この言葉を聞いたとき、とっさに「自分の首を絞めて、どういう気だろうか」とその政治センスを疑った。小泉総理の日頃の言動からして、言いかねないと感じた人は多いだろう。私もその一人だ。その後、発言を否定したことは賢明だったが、その一瞬で足元を見透かされることとなった。

わが国は、十年間に八人もの総理を生み出す国だ。残念ながら、日本の総理の政治生命は鳥の羽よりも軽い。一方、かの国は金王朝とも言われ、首のすげ替えは容易でない。脱北者の続出を見ても、北の封じ込めは、北朝鮮国民の犠牲を伴いながらも、あと一歩のところまで来ており、体制崩壊は秒読みの段階だ。政治生命ならぬ、国家の存亡をかけているのは北朝鮮の方であることは明らかだ。

今回、小泉訪朝が万一、失敗に終われば、いわゆる右バネが働いて、石原慎太郎東京都知事の人気に火がつく可能性は高い。そうなれば、北朝鮮はさらにハードルの高い交渉に直面することになるわけで、石原カードが控えているというだけで有効だろう。

すでにゲームは始まっている。もはや小泉が好きか、嫌いか、現政権がどうのこうのといった話しはともかく、国対国のせめぎあいに我が国として、なんと補、国家安全保障会議のグリーン日本担当らと夕食をともにした。北朝鮮情勢を含めて、情報交換をしたが、小泉訪朝というニュアンスは微塵もなかった。水面下の日朝交渉を承知はしていても、米側は総理訪朝という最後のカードがいきなり飛び出すとは思っていなかったようだ。よって、小泉訪朝がアメリカの陰謀に乗ったものという説はあたらないものと考える。

わが国にとって、久々の主体的外交はまことに結構な話ではある。一方で、日米間の微妙なすれ違いが、今後のわが国の現実的安全保障に影を落とさなければよいとも思う。対イラク攻撃などの不安定要素も抱えた今、日朝間の突出した交渉は、現実の軍事カードを有しないわが国にとって、不利益をもたらすかもしれないからだ。

米国務省の北朝鮮担当者は口を揃えて、「窮鼠猫を噛む」の危険性を指摘する。一方で、北朝鮮の当局者の外交巧者ぶりも指摘する。責め方はロジカルであり、「決してスチューピッドではない」と。矛盾する話しではあるが、過去の金丸訪朝団などの参加者からも似たようなことを耳にする。

窮鼠猫を噛むの図

ちなみに小泉訪朝は八月二七日、来日した米国のアーミテージ国務副長官に小泉総理自らが伝えたという。一部には、今回の訪朝を日米間で綿密にすり合せた結果との見方があるが、私はそうは思わない。前日、二六日の夜、私はかねてより懇意で、先遣隊として来日したケリー国務次官しても勝ち抜かねばならない。なにしろ相手は一筋縄ではいかない北朝鮮なのである。

靖国参拝の約束をまず守れ

問題はわが国だ。残念ながら、ロジカルさに欠け、往々にして「誠意を示せば」といった情緒論が支配する。今回の訪朝への舞台回しをしたとされる外務省の田中均アジア太洋州局長は、自信ありげに訪朝の見通しを述べるが、その理由として小泉総理の頑固さを説く。たしかに小泉総理は「いったん決めたなら、頑固に貫く」との評もある。では終戦記念の八月十五日の靖国神社参拝を大声で叫びつつ、なぜ十三日を選んだのか。その上、靖国に代わる国立記念墓地建設を謳い、官房長官の下での委員会に丸投げしたのか、と思うと、それでも靖国神社への参拝は続けると言う。不可解な頑固さだ。

その他、国内問題についての是々非々はともかく、こと対外的、それも北朝鮮となるとこのようなブレがあっては困る。リーダーの決意はウサギの毛ほどもブレがあってはならない。拉致問題で何人の安否が確認されるのか、何人が実際に帰国できるかという第一のハードルはもとより、それに続く交渉はきわめて長く、茨のものとなろうし、最初の問題設定が狂うと、あとはこじれるばかりだ。小泉がいつまでも官邸の主でありつづけるか、外務省担当者がいつまでその地位に留かも不明だが、「後は野となれ」とほいかない。

北朝鮮の経済状況は「北朝鮮型経済改革」の導入とは名ばかりで、配給するべきものが不如意になっただけの話である。不作続きの農業は、治山治水よりも軍事を優先した政策ミスに他ならず、責任転嫁はどこにもできない。

既に北鮮へ三千億円贈与

私は九九年七月、衆議院の大蔵委員会での質問以来、朝銀問題を真正面から取り上げてきた。九七年五月に破綻した朝銀大阪へ、いつのまにか三千億円余に上がる公的資金が投入された事実とその背景を追い続けた結果、究極としての朝鮮総連本部への家宅捜査にまで発展した。この問題は一種のタブー視により、マスコミもろくに取り上げることもなく、当初は孤独な戦いが続いた。与党幹部から「いい加減にしておけよ」というアドバイスならぬ、警告まで受けた。そのうち、問題意識を共有する議員も現れ、社民、共産を除く超党派の議員連盟も結成するに至った。

管財人の投入や、架空口座の調査、定款変更で受け皿機関に日本人理事長を義務付けるなどの努力を続けたが、金融関連法で対処するには限度があった。強い政治的意思をもって、国家の安全保障という観点からとらまえない限り、公的資金注入にストップをかけるのは難しい法的現実もある。小泉総理がまず決断すべきはいきなりの訪朝ではなく、朝銀への公的資金注入ストップではなかったか。

破綻、再編、再破綻の繰り返しが続いた全国の朝銀信組への公的資金注入に、ほぼメドがついたのは今年の七月だった。日韓共催ワールドカップの対トルコ三位決定戦で韓国中が沸き返った六月二九日の朝、黄海で韓国と北朝鮮の銃撃戦が起こったが、直後に北朝鮮が異例ながら詫びを入れ、世界中を驚かせた。明らかに、日本での朝銀問題の進展を見て、北が急にハンドルを切ったものと考えられる。その他、アフガン攻撃、アメリカによる「悪の枢軸」指定、そして日本の海上自衛隊による不審船への銃撃対応などが北朝鮮をして柔軟な態度をとらざるをえなくした。

君、焦ることなかれ

小泉総理よ、君、焦ることなかれ。小泉総理よ、有本恵子さんのお母さんを見習え。一国の総理として、微動だにせず、だ。動かざるをえなくなるのは相手である。

小泉総理よ、目の前の安っぽい功名心で動かないでほしい。焦ったほうが「負け」である。焦りは北にある。

本拙文はかなり技術論に終始したきらいがあるが、北朝鮮との交渉の大目的は冷戦後も不安要素を抱える東アジア地域の安全保障の確立に他ならない。そのためには北朝鮮における核査察は当然のこと、軍事力拡大への歯止めをかける必要がある。民生中心の経済支援うんぬんが取り沙汰されているが、カネに用途を書き込むわけにはいかない。食糧の確保や道路建設などでの支援は、結局、軍事へ回すカネに余裕を作るだけである。

また、日本国内でデフレ対策を練っても、中国よりもさらに安い労働力が大量に供給されるならば、対策の効果も出てくることはない。東アジアの政治、経済のバランスの変化も別の不安定をもたらす。大局観をもって、今後の対応を決めなければならない。

太陽政策により南北首脳の歴史的会談を実現し、ノーベル賞を受賞した韓国の金大中大統領の惨状を見よ。一時のユーフォリア（熱狂）に惑わされてはならないのである。

小泉訪朝 PART2 西村真悟…2面
PART3 小池百合子…4面

関西防衛セミナー

主　催　大阪府隊友会
講　師　西元徹也（元統幕議長）
演　題　「我が国の危機管理について」
講　師　中西輝政（京大教授）
演　題　「この日本の危機を乗り越える為に」
日　時　平成14年11月８日（金）13：00
会　場　国民会館（大阪市中央区）
　　13：30講演開始
聴講料　￥2000－
詳細は、06-6942-0547（実行委員会）

小泉訪朝…PART 2

衆議院議員
西村　真悟

屈辱的な共同宣言

政治色を排し、日本の魂
拉致被害者救済に全力で

今こそ『救国運動』に立ちあがる時

九月十七日の小泉総理大臣訪朝は、北朝鮮官僚と日本外務官僚が巧妙に仕組んだシナリオどおりに運んだ。主導権は、終始、金正日にあった。北朝鮮は独裁国家であるが、我が国は独裁国家ではない。しかし、我が国の外務省は独裁国家の官僚組織の如く、排他的、独善的である。民主主義国家の「国民の官僚」ではない。

この両国官僚群の目的は、日本から北朝鮮にカネを流すことである。北朝鮮の独裁者はのどから手がでるほどカネが欲しい。我が国外務省はカネを扱う仕事が欲しい。そして、国内では大小の「鈴木宗男的な者」がカネの匂いを嗅いで国交交渉進展をせっついている。　北の金正日は、カネのために一日役者になる。セリフは、日朝会談前に訪問したウラジオストックでロシアから伝授された。ロシアには、一日役者になって日本に謝り、一兆円近くのカネをせしめたノーハウがある。即ち、元日本兵のシベリア抑留をロシア大統領が謝罪し、領土問題で譲歩の用意があるかのような仕草をみせた。これだけで、橋本内閣時代に、我が国は一兆円近くロシアに出したのである。プーチン大統領はウラジオストックで、カネに欠乏する金正日に、日本に対処するノーハウを伝授したと私は想像する。もともとプーチンはソビエト秘密警察の出身で一九九〇年まで現役であった。北朝鮮はそのソビエトの衛星国であったのだ。共産主義者の「微笑外交」の懐柔戦略の論理は、この二人の身に染み込んでいる。

「日本は捕虜六万人（実数は八万人）を殺しても謝ってみせればカネを出すんだ。六名ばかり殺しても謝ればカネを出すに決まっている。共和国のために一日だけ役者になればいいじゃないか」。

この元同僚のような会話がウラジオストックでなされたとしても不思議ではない。このように想像するほど、今回の金正日の態度は、あのときのロシア大統領の演じたシナリオと似ていた。問題は、小泉がピョンヤンに来るかどうかであった。北朝鮮は、小泉の性格と国内状況を観察して「来る」と見切ったのだ。小泉はオッチョコチョイで、自己陶酔型だと。

寝技師プーチンの入れ知恵

確信犯・外務省の罪悪

以下、このようにして始まった今回の日朝交渉のカラクリを概観して報告する。

北朝鮮は、我が国外務省アジア局を舐めきっている。もともと、このアジア局はチャイナスクールで中国外務省日本支部である。今までせっせとコメを五十万トンずつ送ってきたし、東シナ海の工作船引き上げには反対するし、ワールドカップの時の南北ミニ海戦も「偶発的事件である」との認識を示し、何時も「北を刺激しない」ように行動してきた。そして何より、拉致問題は日朝国交交渉の「障害」であるとの認識で北朝鮮と一致している。歴代アジア局長は、「（横田めぐみさんが北朝鮮にいるとの）亡命工作員の発言は信用できない」とか「十人くらいの拉致で国交交渉が止まるのは遺憾だ」とか、北朝鮮が喜ぶ見解を表明し続けてきたのだ。従って、このアジア局と北朝鮮が、今回の小泉訪朝のシナリオを共同作成する土壌は既にできあがっていた。

さて、日本国民には、小泉総理がピョンヤンに行ったから、拉致された十一人の消息が分かったのだと説明されている。しかし、これは嘘だ。総理が行く前から十一名の生存と死亡の一覧表は日本側に渡されていたとしか考えようがない。総理が行って粘り強く交渉したから分かったのではない。総理は、ただ既に出来あがっている屈辱的な共同宣言に署名するためにピョンヤンに行ったに過ぎない。

冷血の外務省

九月十六日、拉致被害者の家族は、首相官邸で官房長官に総理との面会を申し入れた。これに対して、官房長官は、「総理は明日の訪朝を控え、心の澄んだ状態で交渉に臨みたいから、今皆さんにお会いできない」と面会を断った。また、「良い交渉をしたい。その事のみを考えているので、いま会っていただきたくない」とも言ったのだ。これは、「被害者の家族に会えば、心が濁る、良い交渉ができない」と言ったのに等しいのだ。

つまり、このとき既に総理大臣には拉致被害者の運命が報告されていた。だから、総理は家族に会えなかったのだ。総理と官房長官は、ピョンヤンに行って粘り強く相手に迫ったから被害者の消息が分かったというシナリオを家族と国民を欺いても維持した。

そして、翌十七日午後三時、官房長官は、家族を外務省飯倉公館に呼び込んでマスコミの目から隔離して一時間待たせたうえで、生存と死亡を告げたのだ。待たせた理由は、「プライバシーのことなので慎重に調査している」ということだった。しかし、安部官房副長官は、北朝鮮からは被害者の一覧表を渡されていただけで、現地ピョンヤンにおいて日本側が調査する手段も時間も無かったと私に告げた。ということは、日本側は、子供の使いのように、午前十一時前に北朝鮮から渡された紙切れの無いようを被害者家族に伝えただけなのだ。それを外務省は、慎重調査が必要だと偽って、午後四時まで七十才代がほとんどの高齢の家族を待たせたのだ。一体外務省の人間に暖かい人間の血がながれているのだろうか。

金丸・田辺・村山の罪悪の踏襲

次に、北朝鮮はカネが出る引き金である「日朝平壌宣言」の署名にめでたく成功している。これは、一行三十七文で四十行の四項目からなるかなりの長文である。

ここで考えて欲しい。総理と金正日の会談時間は約二時間半である。通訳を入れた外交辞令を含む二時間半の対談では、同じ言語で会談する場合の一時間分くらいの内容しか話せない。そこで、拉致問題を冒頭に話題にして粘り強く交渉し、その後にこの共同宣言の四項目の内容をすべて話題にして議論することなどできるはずがない。時間的に無理だ。ここからも、拉致問題も共同宣言もすべて事前にシナリオとして用意されたものであり、小泉がピョンヤンに乗り込んでできたのではひないことが分かるではないか。

さらに、仮に拉致問題が午前十一時からの総理の交渉によって始めて明らかになったとするならば、その次の共同宣言に署名した総理は「精神分裂」としか解し得ないのである。即ち、共同宣言には第二項に「日本側は過去の植民地支配によって朝鮮の人々に多大の損害と苦痛を与えたことを…痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明した」とある。

しかしながら、この共同宣言競技の直前に拉致された一人一人の残酷な運命が告げられていたのである。もしこのとき始めて明らかになったのであれば、総理も人の子である。大きな衝撃を受け、義憤に駆られたはずである。だが不思議なことに共同宣言には、拉致の「ら」の字もなく、金正日の拉致に対する「痛切な反省と心からのお詫び」も全く記載されていないのである。従って、このことに全く触れることなく、自分だけ五十七年以前のことに「痛切な反省と心からのお詫び」をしてみせる総理は、一種の分裂症としかみなし得ないのである。

割腹した阿南陸軍大臣の息子の罪

以上、本交渉前後の事情を総合すれば、「小泉が乗り込んだから拉致被害者の消息が判明し国交正常化交渉が再開される見通しになった」という、政府がマスコミを操作して作り上げているストーリーは全く出鱈目であることが明らかであろう。もちろん、総理は「行ったことに歴史的な意義があるんです。行ったから拒致被害者の消息が分かったではありませんか」と本気になって弁明するだろう。実は、この総理のように、本気になって役を演じる自己陶酔型のキャラクターほどシナリオに乗せやすく利用しやすいのだ。今回、日本に総理大臣は、日朝官僚共同のシナリオに乗せられたに過ぎない。拉致が明らかになったのは、金正日が日本国民のカネが欲しかったからだ。日本国内には、拉致が明らかにならなければカネが出ない構造が作られていた。だから、金正日は拉致を白状したのだ。そして、この金正日をして白状せしめる構造を作り上げた力こそ、被害者の家族の救出への意欲と日本国民の支持なのである。外務省や政府の力ではないのだ。

それにしても、「亡命者の言うことは信用できない」として横田めぐみさん目撃情報を闇に葬った外務省アジア局長（現中国大使）は、懲戒免職に値する。このとき、この亡命者の目撃情報を受けて救出に取り組んでいたら、横田めぐみさんは救出できただろう。厚生省の課長は、薬害エイズ事件において「何もしなかった」故に業務上過失致死罪に問われたのである。外務省の不作為・国民無視の犯罪はこの厚生省以上ではないか。

それにしても、被害者の家族の方々は、神と対話しうるほどの、まことに深く高い境地に達しておられたのだ。横田めぐみさんのお母さんは、五体裂ける悲しみのなかで、めぐみは日本のために働いたと思う、濃厚な歩みを残していったと思う、この国のためにまだ闘いつづけると語っておられた。

救国運動に邁進あるのみ

確かに横田めぐみさんは、我々日本人の魂に消えない痕跡を残した。それは、同朋を救えない国ではだめだということだ。一見平和に見えても、同朋を守れない国、救えない国は、実は残酷な国で平和でもなんでもないのだ。拉致された少女を救えない国は、いずれ内部から滅びる。めぐみさんは身をもって祖国日本の人々にこの真理を示している。私の中の横田めぐみさんは、日々このように語っている。もはや神様ではない。

そして、我々の眼前には、拉致された日本人を長年放置しながら、死亡の報告を独裁者から与えられた政府がある。その政府は、独裁者にお土産を持参してピョンヤンに行き、握手して帰ってきた。外務省は、「画期的成果」と宣伝し、十月には独裁者にカネを出す交渉を始めるという。

もはや、「政治の刷新」とか「政権交代」とかの次元ではない。日本に国としての魂、日本人の魂を救わねばならない。「救国」だ。「救国運動」しかない。横田めぐみさんはじめ拉致されるという残酷な運命に翻弄された魂は、我々に、愛する祖国、夢にまで見た帰りたい祖国の魂の「救国運動」に立ち上がれと告げている。（九月十八日記）

特・別・相・談・役

今回新たに
御就任いただきました。

衆議院議員
小池百合子 氏
（兵庫6区）

昭和27年7月15日生
関西学院大学中退
カイロ大学卒
参議院当選1回
衆議院当選3回
「アラビア語会話」
等著書多数

衆議院議員
高市　早苗 氏
（奈良1区）

昭和36年3月7日生
神戸大学卒
松下政治経済塾卒
87年～89年米国連邦
議会勤務（金融・ビジネス立法担当）
衆議院当選3回